

小杉町十三塚遺跡調査報告書

1971年3月

富山県教育委員会

例 言

- 一、本書は富山県射水郡小杉町字黒河新に所在した十三塚遺跡の調査報告書である。
- 一、調査は富山県土木部建築住宅課・太閤山住宅団地造成事務所・小杉町教育委員会の協力を得て、富山県教育委員会が行なった。
- 一、調査は淡農氏（富山考古学会長・県文化財専門委員）の指導のもと、社会教育課主事 小島俊彰（県立中部高等学校教諭）、同主事橋本正が担当・実施した。
- 一、事務局を社会教育課に置き、主査有沢宗一が事務を総括し、主事高見三郎が主に担当した。これには社会教育課員の協力があった。
- 一、写真撮影・遺物整理・各種実測・トレースは小島俊彰・橋本正が行なった。
- 一、調査には、小杉町有志・県立大谷技術短期大学生・県立小杉高等学校地歴部員の協力があり、遺物整理には県立上市高等学校地歴部員の助力があった。記して謝意を申し述べる。
- 一、本書の執筆は地質地形については邑本順亮氏（高岡教育センター）をお願いし、他は小島・橋本が行なった。各々の責は文末に示した。

富山県教育委員会

目 次

第1章	はじめに	2
	○調査にいたる経過	2
	○周辺の遺跡	2
	○地形と地質	3
第2章	調 査	4
	○調査の経過	4
第3章	遺 構	5
	○十 三 塚	5
	○平安時代のビット・溝	8
第4章	遺 物	11
	○須恵器・土師器	11
	○鉄製品その他	13
	○縄文式土器	14
	○土製品・石器	16
第5章	ま と め	18



- 1 伊勢領遺跡 (縄文-弥生時代)
- 2 中山北遺跡 (縄文時代)
- 3 中山南遺跡 (古墳時代)
- 4 ニツ山古墳群(古墳時代)
- 5 園山遺跡 (弥生時代)
- 6 太間遺跡 (縄文時代)
- 7 十三塚遺跡
- 8 日ノ宮城跡
- 9 三十三塚遺跡
- 10 上野遺跡 (縄文-古墳時代)
- × 先土器時代の遺跡
- 縄文時代の遺跡
- 古墳
- 土師・須恵器散布地
- 築跡

第1図 地形図

第1章 はじめに

調査にいたる経過

小杉町太閤山周辺の台地は、連々とつらなつた小丘陵群が、広大な射水平野に舌状につき出したような形で横たわっている。地理的には富山・高岡市のほぼ中間に位置し、古く豊臣秀吉が、富山城主佐々成正を攻めた時、陣を張った地であったとの伝承が残る。

丘陵は、果樹・茶・野菜類の栽培に適し、静かな農村地帯として最近まで開発されずにいた。特に、射水近辺特産の水島柿の味は、なつかしい郷愁を多くの人に感じさせる。

その地理的位置を利用して富山・高岡新産業都市構想の一環として、大閤山住宅団地の造成が計画され、県都のベッドタウンとして、日一日とその姿を変えつつある。

大閤山周辺は、古くより数多くの遺跡が確認されており、中山南遺跡をはじめ、いくつかの遺跡に対して発掘調査が行なわれ、その一部の保存措置も実施されている。

昭和44年度末に、県土木部建築住宅課より昭和45年度事業地区に、遺跡群中の十三塚遺跡が含まれるとの連絡があり、数度にわたる打ち合わせの結果45年度事業として教育委員会が緊急発掘調査を行なうこととなった。

事前の遺物分布状況調査で、縄文式土器並びに平安時代に属す須恵器の散布が認められ、十三塚以外の遺構の所在が予想された。

調査に先立ち、小杉町十社宮城義守宮司の司祭で清祓祭を取り行ない調査に入った。

種々、調査に協力された地元小杉町教育委員会をはじめ、富山県太閤山住宅団地造成事務所・大谷技術短期大学に、心からの謝意を申しのべる。

本書が消失する運命に遭遇した十三塚遺跡のささやかな記録としてだけに終らず、とかく手違ひの結果邪魔物扱いをうける遺跡の保護並びに活用の方策を導き出す一資料となることを切に考えております。

(橋本)

周辺の遺跡

十三塚遺跡の周辺には、各時代にわたる多くの遺跡がある。

縄文時代 良く知られた遺跡では、大閤遺跡(中期)〔県教委1965〕・中山北遺跡(前期・晩期)〔木倉1959〕がある。前期中葉～中期後葉にわたる上野遺跡〔木倉1959〕もやや離れ

である。丘陵をおりと、伊勢領遺跡〔木倉1959〕がある。大石棒や石錘・石斧と晩期の土器片が出土している。また片刃磨製石斧も発見されていて、弥生時代にまでわたる遺跡と考えられている。この他にも遺跡は多く、特に中期前半に位置づけられるものがほとんどである^①。

弥生時代 伊勢領の他に囲山遺跡〔橋本1970B〕がある。弥生時代末期の方形周溝基4基を発掘し、現在は公園化されている。

古墳時代 中山南遺跡〔県教委1965・1966・1969〕があげられる。6次にわたる調査によって、現在8住居址が確認されている。古墳時代初期の集落址である。中山南遺跡以外にも、古式土師器は丘陵上にはもちろん丘陵下のあちこちにも数多く出土している。なお、中山南遺跡の東、二ツ山には5基の方墳があったが、明確な時期は不明である〔県教委1965〕。

歴史時代 内容は不明な点が多いが、須恵器や土師器の散布地は多い。木倉豊信氏は、下条川の自然堤防を利用した生活を考えている〔木倉1959〕が、興味ある研究課題であろう。十三塚遺跡の東2キロメートル、黒河新と中老田の間に三十三塚がある。柳田国男が、「越中射水郡老田村字中老田にあるものは、田の中に三十三併列し、十七日即ち中央の大塚を大将塚と云う（越の下草）」〔柳田1910〕と説明している遺跡である。また十三塚遺跡の西方1キロメートルの台地舌端部に、戦国末期の永祿・元龜のころ神保長職が在城したと伝える日宮城跡がある。 (小島)

注① 周辺の遺跡については、山内賢一氏の御助力をえており、この指摘も氏の注意するところである。

地形と地質

射水丘陵の北端にあたるこの付近は、海拔20～40メートルの比較的平坦な地形をもち、小杉町付近の国道8号線から遠望すると、その段丘地形が明瞭であるが、台地の開析はかなりすすみ、小谷がきざまれている。

この台地の北側には広々とした沖積平地が広がり射水平野を作っている。一方南側は、少しづつ高まり、高津峰山(117メートル)を主峰とする山地へ連なっていく。台地の前縁に接する沖積平地は海拔5～6メートルで、遺跡の十三塚付近は比高15～20メートルの台地である。

丘陵北端部の地質は、泥岩がらの砂泥互層で、太閤山の西側ではクルミ・エゴノキなどの植物化石を産出する。この地層は第四系の上部洪積統の下部に相当し、この付近では*日の

宮礫砂泥互層*と呼ばれている。

縄文前期から土師器の時代にかけて、射水平野の花粉学的研究が行なわれた結果〔藤1965〕によると、縄文前期の地積物中には現在の射水平野の植生よりは温暖系の植物がかなり含まれるのに比べ、その後は減暖化し、中山の土師器含有層の分析結果ではほとんど現在の植生と同じであったという。そして縄文中期頃の気候について現在の秋田～新潟～仙台付近の条件に近く年平均11～12℃で現在より2℃位低温だったであろうとしている。

したがって、縄文前期には、この台地のすぐ近くまで入り込んでいた海岸線も、だんだん退き縄文中～後期には広い潟を残して、現在の海岸近くまで後退し、その後は潟の埋積がすすんだものと考えられる。
(邑本)

第2章 調 査

調 査 の 経 過

発掘調査は、昭和45年5月23日より同5月30日までの、8日間にわたっておこなった。

塚は、13あって、便宜上西から東へ第1号塚から第13号塚までの名称をつけた。

塚は、中央に位置する第7号塚が最も大きく、一辺4メートルの方形状を呈している。他は皆円形のプランである。第3号塚は、ほとんど痕跡程度に残っているだけであったし、他の塚も一見かなり崩壊しているのではという感を与える外見である。

この13の塚全てを各4区分し、4分の1か2分の1を掘り切ることによって、塚の築造状態や遺構の存在を確認することとした。

第1～第5号塚は、台地が広がったところであるために、手入れのゆきとどいた畑地で、塚はその真中に当たっている。そのためか、盛土はやわらかく、特に第1号塚の中からは、青靑とした根をはった茶の木が出たりして、本来の塚は消滅していることを示していた。

第5～7号塚は、外見もよく、土のしまり具合もよかったが、特に遺構などの検出はできなかった。第7号塚は、大将塚と付近の人々が呼んでいるものだが、1.5メートル近くの高さを今に残っていて、この断面は意識的に盛土したものであることを示していた。しかし、基盤の黄色土を盛り上げたりはせず、腐植土を利用していった。また、同じく塚の土層の検討によって、かなり崩壊していることがわかり、かつてはもっと大きかったであろうと推測された。

第8～12号塚は、やせ尾根上にあつて、開墾からは守られたようだが、逆に自然によって崩壊させられた様である。これからも特に遺構等の検出はされていない。

第13号塚は、高さも1.5メートルと大きくきれいな土饅頭状で期待されたのだが、塚中から酒ビンやビニール袋が出たりして、新しい盛土と考えざるをえないものであった。

第4号塚と第12号塚では、区を東西にのばして、塚をめぐる溝の存否を確認しようとしたのだが、第13号塚西側10メートル近くに、周囲の焼けた円形ピット1基を発見し、第4号塚の東側にも同じく周囲の焼けた円形ピットと数条の溝遺構を発掘した。しかしこれらの遺構を塚と積極的に結びつける資料はない。第4号塚東側の溝が塚とは関係ない方向を取っているなどは、かえって塚との無関係を説明するものであるかもしれない。

この台地の表面採集を発掘調査前に行ない、第3号塚の北側と、第5号塚の北側台地の張り出した地点で、それぞれ縄文式土器と土師器を採集し、J地点・H地点と名づけた。

J地点は、台地のわずかな谷部に当り、ここに黒土が流れこみ、この黒色土中の6メートル四方程度の狭い範囲にのみ、縄文式土器は含まれていた。

H地点は、すでに基盤が出てしまっていて包含層等は見当らなかつたが、数センチの掘り込みを残すだけの、周囲の焼けたピットを1個発見している。 (小島)

第3章 遺 構

十 三 塚

○十三塚の記録

小杉町橋下条黒河新地内の十三塚について記されたものは、2・3ある。

その一つ『加能越三州地理志稿』には、「十三塚在橋下条村之山中。相傳。上杉謙信入本州。斬江浪五郎等。築比首墳」と首塚伝説を伝え〔日置謙著〕、柳田国男氏もこの記事から橋下条黒河新の十三塚を『地名表』の中に加えている〔柳田1910〕。

『越の下草』では、「十三塚 法日(内)庄橋下条村 山の中に13づつならひて、兩処にあり。古來何のゆえという事をしらず」と記している〔宮永正運著〕。

『小杉町史』の中で木倉豊信氏は、上記の記事を紹介した後、「塚周囲で須恵器片が発見されることもあるので、塚の一部には古墳を利用したものもあるのではないか」と説明している〔木倉1959〕。

このように『三州地理志稿』が相傳として戦国時代の武将の首塚だと記す以外に、十三塚がいついかなるために築造されたのかを説明する資料は見当たらないようである。

○塚の現況

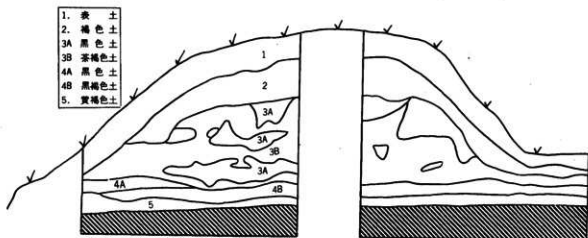
『小杉町史』には、「長い間にけずりとられたり、開墾によって往時の姿はほとんどとどめていないようだ」と記しているが、発掘見学の人々の中からも、昔はもっと大きかったという言葉をよく聞いた。現在でも、耕作の人々は、くずすとたたりがあると耕作をさけておるようだが、長い年月の間に大きく変化していると推測される。

発掘時、塚は13あって、ほぼ一直線に、約13メートル程度の間隔をとって並んでいた。7番目の塚は、高さ1.5メートルと最も大きく、形も方形に見える。しかし畑の区画と塚の裾が同じなので、当初の姿そのままといえるかどうかは、不明である。付近の人々は、この塚を大将塚と呼んでいる。他の塚は、円形で高さも1メートルをこさず小さい。塚は雑草や、小竹におおわれている。

○塚の発掘

各塚を4区分し、その4分の1区画、もしくは2分の1区画を発掘し、築造状態や内部施設の存否などを確認した。

最も良く残っている7号塚は、基盤の黄色土層上に、黄褐色土と黒褐色土がほぼ水平に堆積している。この上に、黒色土を所々帯状にはさむ黒褐色土があり、この上部に褐色土がのっている。水平堆積している黒褐色土が塚築造時の表土で、この上に付近の腐植土を集めて塚を築いたのであろう。周囲を基盤まで掘りくぼめてその黄色土を盛り上げたり、溝を掘り周らすこともないようである。内部に特別な施設は検出できなかった。



第2図 7号塚セクション S = 1 : 30

他の塚にも特殊な状態を見ることはできなかったが、1号塚では塚の内部から青々とした茶の木が出てきたり、13号塚では酒ビンやビニール袋が掘り出されたりして、塚の荒廃している様子が明らかであった。

塚からは、縄文式土器片が2・3片出土したり、4号塚の盛土内から鉄袖のかかった越中瀬戸焼の甕片（第6図）が出土してはいるが、築造年代を確認する資料はない。また後述の須恵器を含むビットと塚を積極的に結びつけるべき所見もなかった。さらに木倉氏が考えられた一部古墳の利用も、須恵器が古墳時代を降るものでもあり、可能性はないであろう。

〇十三塚

結局発掘調査からは、塚が何時の時代に、何のために造られたものなのかを解きあかす手がかりはえられなかった。ここでは、この十三塚についての2・3の論考を紹介して、この章のまとめとしておきたい。

柳田国男氏は、十三塚を境塚と想定し民居鎮護のための修法塚であろうと主張している〔柳田1910〕。

大森志郎氏は、『藤葉栄衰記』の記事から、人々の知見にない十三塚を発見し、この塚は文安4年（1447年）武将が怨霊となってあらわれた妻を祀ったものと結論している。またこの事例より推して、十三塚が仏法の修法壇で、十三塚は正式には十三壇とよばれるべきであり、この壇を設けての修法は十三壇法と称せられることになるという〔大森1967〕。

また、歴史学の立場から段木一行氏は、東京都南多摩郡の十三塚が村境になったのは、貞享3年（1686年）の境相論時、幕府権力による境界線設定の手段にされたことによるとして、十三塚は境塚として築かれたものではないのではと、柳田説に疑問を提起している。さらに段木氏は、庄園制度の終焉期がまさに室町時代であり、農民の中に浸透しようとする庄園領主の末期的努力が十三塚のような修法壇として現われてくるのではないかと結んでいる〔段木1970〕。

（小島）

平安時代のビット・溝

十三塚と直接的には無関係の遺構がH地点・4号塚地区・13号塚地区で発見された。

H地点1号ビット (第3図)

直径約1.2メートル。形状は隅丸方形でビット底部がわずかに遺存する。壁の大部分は耕作等により消失したものと考えられる。

残存部は黄色上に掘り込まれており、底部・壁面にかなり焼土が附着する。加熱を受けたことが類推される。

出土遺物は無い。H地点には極端に風化した土師器細片等が認められる。所属は、4号地区同様平安時代と考えられる。

13号塚地区1号ビット (第4図)

2個の小ビットが切り合ったようにも考えられる。しかしH地点ビット同様、遺構面が表土直下でしかも一部のみの遺存状態からは証明不可能であった。

底部・壁面はやはり加熱を受けており、炭化物が含まれる黒層が全面にわたり認められた。出土遺物は無い。

4号塚地区 (第5図)

十三塚遺跡の遺構中、もっとも良い遺存状態を示すが、表土直下の為、おのおのの切り合い関係が不明確である。

遺構は大略ビットと溝に二別される。

溝はほぼ平行する4本が認められ、その規格性より、同時期の所産と考えられる。

切り合い関係は1号ビットと3号溝で認められ、溝は1号ビット埋没完了後に作られている。

他の遺構は不明確である。壁等の大部分は消失したものと考えられる。

土層は大部分の遺構が茶褐色土層で埋められている。

1号ビットは、壁面・底面が焼けており、底面から1層めと3層めは炭化物が大量に混ざる層となっている。他の層にも焼土がかなり含まれており、火と密接な関係を持つものと考えられる。

底面からの三つの層を除く全ての層に、混存する形で遺物が含まれており、比較的短期間の内に埋没が完了したものと云えよう^①。

規格性がよく似たビット状遺構は、都合3基発見されたことになる。

規模並びに加熱を受けたことが共通している。更に、4号塚1号ビットからは、鉄滓が発見されており、製鉄に関係がある遺構と考えられる。同地区からは1個のフィゴの口と「スサ」入りの焼土が発見されていることもこれを強く指示するものと言えよう。

太閤山周辺の丘陵地帯には鉄滓を出土する地点がかなり認められている。

その多くが平安時代に属す須恵器を同出する。更にその時期の須恵器を作った窯跡の存在が知られている。太閤山一帯は平安時代に一大工業地帯を形成していたのであろうか。

さて、本遺跡の遺構等に関する考察は、憶説の域を出ないであろうが、若干の推察を試みたい。

4号塚地区1号ピットには2枚の炭層が認められることは先に記した。

遺構底面についた炭層とその上についた焼土入赤褐色土層は無遺物層で、かなり水平な堆積状態を示す。この堆積状態はその上の炭層にもあてはめることができ、ピットが自然埋没を開始する先にピット内に入っていた感を受けさせる。底面付近は壁面に比べあまり加熱を受けていないことから、張り床を持たせたものと考えられる。和島誠一氏の言う毛細管現象で下層から水分が昇るのを防ぐ目的の施設であらうか〔和島1967〕。

だとすれば、「スサ」入りの焼土、フイゴの口と関連づけて、タタラの種類と考えたいが……。

速断はさけ、鉄滓の分析並びに他の関連遺跡の調査を待って解答を得たい。

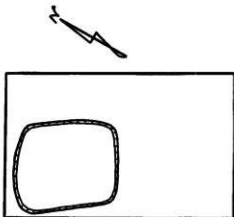
溝状遺構は何を意味するか今のところ不明である。タタラ跡と目されるピット状遺構との関連性も正確には把握できない。

ただ出土遺物の点で共通点が認められるだけである。

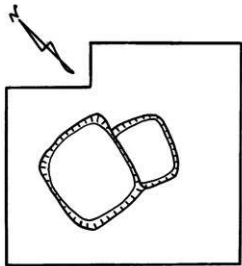
おそらく、ピット状遺構とともに製鉄に関係のある遺構の一部であることは間違いなからう。(橋本)

註①1号ピットの埋没状況については更に後述するが、人の意志により埋められた部分と、自然に埋まった部分がある。遺物は、後者に含まれ、大型甕、紡錘車、土師器等が混在する。層による遺物差異は無い。

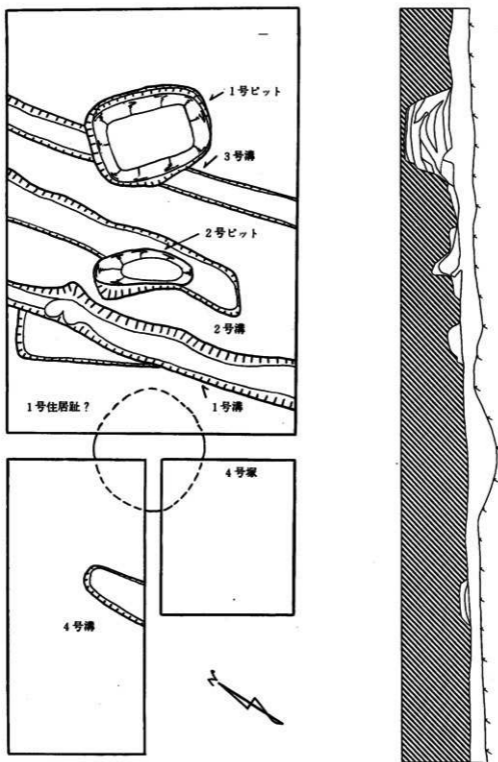
註②主に富山考古学会山内賢一氏によりその所在が調査されている。大部分が未調査である。



第3図 H地点地区ピット S=1:50



第4図 13号塚区ピット S=1:50



第5図4号塚区実測図 セクション S = 1 : 50

第4章 遺物

須恵器・土師器

大部分が4号塚地区で検出された。図化を行ないえた個体は須恵器23個体、土師器5個体である。以下器種・大きさ別に概述する。

○須恵器

杯—高台の無いAと、高台のあるB₁—B₄の2種5類が認められる。

杯A(図版第二, 1~5)

口径約11.8センチメートルで高台は無い。概して規格性が強く、作りも手早く簡単に行なわれている。焼成はこの時期のものとしては普通で、体部から口縁部^①にかけヨコナデが行なわれており、ヘラケズリは認められない。

杯B₁(図版第二, 6)

口径約10.7センチメートルで張り付け高台が認められる。作り・焼成等は杯Aと共通し、体部たちあがりは杯Aより深い。

杯B₂(図版第二, 7)

推定口径約12センチメートル。B₁類同様、底部から体部にかけて、多少角張っているが、著しい角とはなっていない。体部たちあがりの角度は杯Aにくらべ大きく、法量も大きい。

杯B₃(図版第二, 8)

口径約13.8センチメートル。B₁・B₂にくらべ更に法量が大きい。底部を欠損する。

杯B₄(図版第二, 9)

底部しか無いが、口径は15センチメートル程度と察せられる。

蓋—全てに宝珠つまみがつき、法量により5類に分類できる。

蓋A₁(図版第二, 10・11)

口径11.8センチメートル。天井部には宝珠つまみがつけられたと考えられる。

ヨコナデがほぼ全面に行なわれ、11には、器壁内にへげ目が認められる。成形の第1段階(田辺1966)に関係があるのだろうか。

蓋A₂(図版第二, 12~15)

口径12.8センチメートル。宝珠つまみがつけられたと考えられる。作りその他は蓋A₁に似、14には器壁内のへげ目が認められる。

蓋A₃(図版第二, 16)

口径16.8センチメートル。内外面に灰釉がかかり、天井部にヘラケズリが認められる。あるいは、ヘラキリ目か。

蓋A₄(図版第二, 17)

推定口径17.8センチメートル。

蓋A₅(図版第二, 18)

推定口径18.8センチメートル。

以上の他に、宝珠つまみが2個体認められる(図版第二, 20・21)。

壺—高台のないものと、高台のある都合2個体が出土した。

壺A(図版第二, 23)

本遺跡出土品中、ただ一つの完形品である。ほぼ全面をヨコナデ痕がおおい、正面には文様意識のない引っかき痕が残される。焼成その他は普通。

壺B(図版第二, 22)

張り付け高台を有し、表面には一部灰軸がわく。

底部から体部にかけてかなり強い屈曲が認められる。全体的に厚手の作りで、胎土も他にくらべて精製されている。

壺一數個体分の破片があるが、大型の一個体を図示した。

壺A(図版第三, 1)

推定口径45.8センチメートル。かなり大型である。

くびから胴部にかけて強い屈曲を見せ、胴内面には同心円文、外面には叩き目が認められる。

くびから口縁部にかけての成形は入念で、内面下部はヘラケズリ、上部はヨコナデ調整を受ける。

口縁部には突帯が内外面に1条ずつ設けられ、外面の直下には3条の波状文と1条の沈線文がめぐらされる。

全面に灰軸がわき、胎土は壺Bに似て、精製されている。

胴部はほぼ球形を示すものであろう。

壺胴部外面のタタキ目は大部分平行タタキ目であるが、一部繩巻と考えられるものも有る。

○土師器

壺(図版第二, 19)

口径約19.3センチメートル。作りは須恵器壺とよく似る。宝珠形つまみがつくかどうかは不明で、表面には丹がぬられている。

壺一法量の違いによる2種類が認められる。

壺A₁(図版第三, 2・4)

口径約9センチメートル。小型で、内外面にヨコナデが認められる。

底部外面はヘラケズリを受けており、全体的に二次的な加熱痕をとどめる。

壺A₂(図版第三, 3)

推定口径12.3センチメートル。作りその他はA₁類に似る。

鍋(図版第三, 5・6)

推定口径30~31センチメートル。數個体の出土をみる。

くの字状の口縁部を持ち、外面はヨコナデ、内面下半及び、胴内外面上部は櫛目でおおわれる。底部側は内面に円心円文、外面には平行タタキ目が認められる。底部は更に強度の火熱を受ける。

胎土には直径1~2ミリメートルの砂が少し含まれる。

以上、須恵器・土師器の概観を試みた。

近年、北陸地方における該期須恵器・土師器の編年作業は吉岡康輔氏らを中心に押し進められており、その成果の一部が加賀三浦遺跡の研究〔高堀・金山・吉岡・浅香1967〕として公表されている。

本遺跡の資料は、その石川県三浦遺跡中層出土の遺物群に近似しており、ほぼ同時期の所産と考えられる。

ただし、細部については多少の違いが認められ、更にセット構成もかなり異っている。前者については供給地すなわち製作地の違いがあらわれていると考えられ、後者については、

遺跡の性格の違い—十三塚遺跡は鉄製作に関係の深い遺跡と考えられる—がその差を設けたものであろう。

本遺跡の周辺で幾つかの竈跡の存在が知られているが、大部分未調査である。

具体的な対比、並びに細部にわたる考求は竈跡の内容が掌握された後に行なうのが適当であらう。

今回、時期的なことについては加賀三浦遺跡の成果に従い、八世紀末葉に近い所産と考えておく。大方の御叱正を待ちたい。(橋本)

註①杯の区分、及び呼び名、その他の用語は田辺昭三氏の成果に従う〔田辺1966〕。

註②成形の第一段階については粘土ひものまきあげがあげられている〔田中1964, 田辺1966〕

しかし、その成果は大部分「杯」であげられたように感じられる。蓋における本資料のような例はあまり注意されていないようであるが、筆者には蓋の場合には粘土ひものまきあげ手法以外の手法が採用されたように感じられる。詳細は類例の増加をもって検討したい。

鉄製品その他

全て4号塚地区の発見であり鉄器3点、フイゴの口1点を数える。他に若干の鉄滓がある。

○フイゴの口(図版第4上, 1)

4号塚出土・推定直径5センチメートル。

フイゴの口の製法についての知識はないが、おそらく、焼物の一種で、あらかじめ製作されたものであろう。現存部は、口部であるが、強度の二次的加熱を受けたことを示す。表面には軸が吹き出ており、なめらかな面を形成する。かなりの焼きしめ状態を示す。

○刀子(図版第4上, 4)

4号塚出土。鉄製。

先端部及び基部の一部を欠損する。保存状態は普通である。推定全長約8センチメートル。身に位べ、基部の長いことが目立つ。製法については不明確であるが、鑄の形状より(瘤状にふくれる)鑄造と考えられる。

○紡錘車(図版第4上, 3)

4号区1号ピット出土。鉄製。

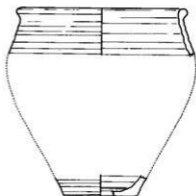
本県初の出土品である。保存状態はかなり良い。円形断面を示す軸の大部分を欠損する。車部は二枚の鉄板を合わせたような形状を示し、内部は中空となっている。車部内部に一部炭化物が認められ、更に瘤状のふくれを示すこと、更に軸の折れ口の状態から、鑄造製品と考えられる。

○鉄器断片(図版第4上, 2)

4号区出土。鉄製。

形状不明。鑄造品で断面は長方形となる。何かの基部に属するものと考えられる。

以上、鉄器類その他は出土状態より本遺跡の主体をなす、須恵器・土師器類と時期を同じくして製作されたものであろう。(橋本)



第6図 6号塚出土甕 S=1:4

縄文式土器

十三塚遺跡における縄文式土器は、塚東側のJ地区と名づけた一區画に集中していたが、量的には少ない。6号塚と8号塚からも数片の土器が出土している。塚構築時に、混ざりこんだものであろう。

J地点の現地地表は平坦であるが、基盤の黄色土は傾斜していて、この上に他の地域よりも部厚く1メートル近くの黒色土が堆積している。谷状の傾斜地に、黒色土がながれ込んでいくわけだが、この層中に遺物が包含されている。出土地域も狭く、短期間の所産であると考えられる。塚近辺からの出土土器もほとんどが同期であろうが、6号塚の1片は太い丸味をもつ沈線と雨滴れ状列点文が施文されていて、中期最終末に比定されるものである。

以下J地点出土の縄文式土器について記す。

○器形

口縁上部がやや内湾し、頸部のしまるキャリバー形深鉢が主体である。胴部は若干のふくらみをもつだけで、変化の少ない筒形である。

口唇部は、内面から外面へそりぎみの丸味をもつものと、内側を一段厚くして稜を作り出しているものがある。

9～11は、深鉢とするには口辺から胴部への角度が強すぎ、また文様も他とは違った統一を持っているので、浅鉢と考えている。

他に、器全面に縄文を施す深鉢があるが、器形は不明である(34・47)。

○施文

口縁上部に、2～3条の半隆起線を引く。1条目には爪形文を施す。この爪形文は、間隔の粗いものである。口縁に半円状の突起がつけられたりもする。

頸部にも数条の半隆起線を横に引き、口辺と胴部を区切っている。この区画された口辺は、縄文を転がすかあるいは無文とし、この上に縦位の沈線を1センチメートル程度の間隔を置き引き下している。沈線の起点に三角形の彫り込みをして、蓮華文風に見せているものもある。また隆帯を縦に垂れ下げたりもする。

15～17も口辺部片であろう。2センチメートルほどの無文帯をつくり出し、縁を刻んでいる。

胴部は、縄文を施文するのみのもの、半隆起線文の引き出した区画を格子目文で埋めるも

の、あるいは縄文地に半隆起線を引くものなどがある。他に、縦や横位に半隆起線を引くだけのものもあるが、縄文のみを施文しているものが最も多い。

浅鉢と考えられる6・9・10・11は、深鉢とは文様が違う。口縁上部には1条の半隆起線を引くのみだし、10・11は爪形文も施さない。口辺部も幅狭く、細かく縦に沈線を引いている。胴部は無文であろう。

施されている縄文には、無節や3段の縄を施文したものは見当らず、全て2段の縄を回転したものと言ってよい。

2段の縄文も、LRの縄がほとんどで、しかも横位に回転したものがその半数を占めている。LRの縄は、他にも縦位に回転したものや、縦と横、縦と斜方向に組み合わせて施文した変則的なものも若干ある。しかし、これら組み合わせたものも、出来上りの羽状文を意識したものではないようである。

RLはごく少数だが、縦位のものも横位に回転したものもみられる。

○編年位置

半截竹管による半隆起線文を文様の基調とし、爪形文を施文することから、中期前葉の編年位置が考えられる。

燃糸文がないことは新保式〔高堀1952〕との違いであり、半隆起線文を器全面にまだ展開しないことは、天神山式〔富山県・魚津市教委1959〕への比定を無理としている。

キャリバー状の器形、無文帯の縁を切る手法、蓮華文風の施文、胴部の格子目文などを考え合わせると、新崎式〔高堀1959〕に比定するのが妥当であろう。

近辺の同期の遺跡としては、太閤遺跡があげられる。内容的には、全く同一といってもよい。また、太閤遺跡の南側台地、十三塚遺跡の南側台地にも同期とみなされる遺跡がある。十三塚遺跡も含めて、遺跡の規模は大きくなく、単一期の様相を呈することなども相似かよっている。

この新崎式の時代は、北陸では一つの転期である。北陸の貝塚は、前期の淡水系のものと、中期に入ってから鹹水系のもとの2種あるが、この中期の貝塚形式の始まりが新崎式の時代である。石川県上山田貝塚〔高堀1957〕・掘松貝塚〔高堀1957〕などがそれである。期を同じくして鹹水貝塚が形成されることは、自然環境の変化が推測され、この期に太閤丘陵一帯に小規模な遺跡が数多く営まれることは、興味ある問題であろう。 (小島)

土製品・石器

J 地点からは土製品が2点、石器としては、黒曜石製の不定打製石器1点とフレイク数点が出土した。石器の大部分は他の地点で発見されたものである。

○不明土製品(図版第4下, 1)

J 地点出土。色調は赤褐色で、胎土に細砂を含む。かなり風化が進んでおり、完形品か、破損品かの判定はできない。

正面と思われる面に、鼻・目状の表現がとられている。又底面は凹状になっており、ヘラによるきざみが一部認められる。

○有孔土製品(図版第4下, 2)

J 地点出土。色調は黄褐色で、胎土に細砂を含む。形状はほぼ長方形で、下部が一部欠損する。上部には焼成前に内外面よりあけられた穴があり、裏面は凹状になる。用途・例品については不明。

○磨製三角形石器(図版第4下, 3)

6号塚I1区出土。石質は輝緑泥片岩。石器のほぼ全面をいくつもの磨面がおおっており刃部はない。一部磨きのかからない部分があり、それは磨きをかける前にあらかじめ打製により石器の原形がかたちづくられていたことを示す。すなわち橋本のいう石器製作第2次加工^①で、打製→磨製の二つのテクニックが用いられたことになる。磨面のすりあげ方向は不定であるが、側面に近いほど側面にそってすりあげる傾向がある。

又、三つの側面は長軸に平行してすりあげられており、すりあげ方法は磨法第I種^②による。

これらの諸特徴は縄文時代に一般的な磨製石斧の製法と合致する。本例のような石器の類例は筆者の知見にない。ただ縄文時代中期～晩期の遺跡からたまたま発見される二孔を穿った三角形石器との類似点が認められる^③。本例はそのような石器の未製品であろうか。

なお、本例の所属時代については、多少の疑問もあるが製作法より、縄文時代と類推する。

○打製石斧(図版第4下, 4)

10号塚RI区出土。

形状はバチ形で片面に自然面を残し、他は第一次剥離面^④を大きく残す。本県の縄文時代中期にもっとも多い特徴を持つ。

○不定打製石器(図版第4下・5)

J 地点A V区出土。石質は黒曜石。

表裏面共、第1次剥離面を大きく残し、第2次加工は表裏面に加えられる。裏面側は、バ
ルプ及び第1次剥片の先端を取り去るように加えられており、全体に雑なスクレイパー様石
器となっている。

○擦り石(図版第4下・6~7)

6-9号塚イ1区、7-7号塚イ1区出土。石質は硬質砂岩系。

偏平隋円形の自然丸石を用い、磨面は上下二面に認められる。下面には一部打列面があ
る。

7-偏平隋円形の自然丸石を用い、磨面は6面あったと類推される。

磨面の形成については、使用の結果によると考えるのがスムーズであるが、あらかじめ、
磨面が人工により用意された可能性もある。これについては後の機会に論じたい。又、本資
料のような偏平な丸石を利用する擦り石は新しい要素と言え、おそらく縄文時代中期の一般
的傾向を示すと考えられる。

○石刀形石器

表採。石質は砂岩系。

かなり風化しており、しかも小断片である。形状から石刀形石器と考えるが、多少の無理
もある。

○その他石片

石片は、大部分細片で、黒曜石・青色チャート・鉄石英がある。

黒曜石は近辺に出土地がなく、しかもかなり良質のものである。

縄文時代の物質の交流を考える上での一助になろう。

大部分、石鏃等の小型石器の原料として利用されたものと考えられる。(橋本)

註①石器製作の手順に関する考え方を第1次から第3次加工として述べたことがある

[橋本1968]。本例の第1次加工の有無については不明確である。

註②磨製には砥石を動かして磨く第II種と、製品自身を動かす第I種がある。

註③装飾品とされている例が多い[早川1936等]。形には隋円形、円形等のバラエティーがある。

註④石器製作第1次加工によって生み出された面[橋本1968]。

註⑤立山町吉峰遺跡から縄文時代前期に属す擦り石が多数発見されており、その多くは断面
三角形の自然石を利用している[橋本1970A]。一部、断面が偏平なものが認められ、出
土状態より、中期に属すものと考えられる。又、偏平なものは、磨面を2~6面取るもの
が多い。更に凹み石と併用されるものも認められる。

第5章 ま と め

概述した各章の内容を、以下簡条書に要約し、まとめにかえる。

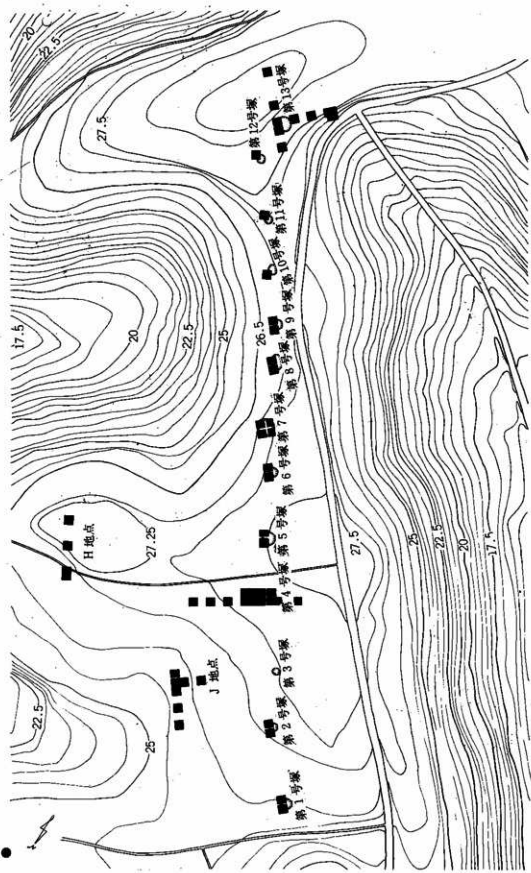
1. 13の塚は、ほぼ等間隔で一直線上に並び、中央の7号塚は、最も大きい。塚の崩壊は激しく、一部築造時の原形を全くとどめないものもある。
2. 原形を最もよく保持している7号塚は、築造時の地表面に、腐植土を盛りあげて造りあげていたことが明らかとなった。
3. 塚およびその周囲からは、特に関連した遺構は発見されず、また築造年代を決定する遺物の出土もなかった。
4. 塚以外のものとして、ビット状遺構3・溝状遺構4が発見された。
5. 最も保存状態のよい遺構群の発見された4号塚地区からは、須恵器・土師器・ふいご口・鉄滓・鉄器・「スサ」入り焼土などが、検出された。
6. ビット状遺構は強度の加熱を受けており、上記伴出遺物から製鉄跡に関連性があると予想した。詳細は類例遺跡の増加に待ちたい。
7. 溝状遺構については、その全貌を検出し得なかったが、少なくともビット状遺構と時代的には強い関連性を持つものであろう。
8. 出土遺物のセットは、石川県三浦遺跡中層出土遺物に類する。細部については多少の違いが認められるが、おおよそ8世紀末葉に近い所産と考えた。
9. J地点で少量の縄文式土器が出土した。中期前葉の新崎式に比定される。
10. 近辺にも新崎式単独の小遺跡が数カ所あり、中期前葉の遺跡立地に興味ある問題を提起してくれる。

参 考 文 献

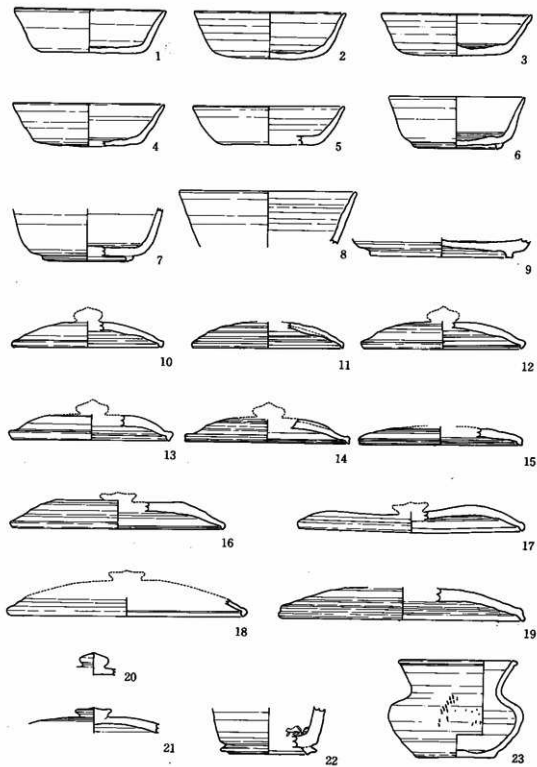
- ア 浅香年木・高瀬・金山・宮岡1967「加賀三浦遺跡の研究」石川県教育委員会・松任町教育委員会
- オ 大谷清瑞・広田・渡1959「天神山遺跡調査報告書」富山県教育委員会・魚津市教育委員会
- 大森志郎1967「十三塚の発見」民俗民芸双書20, 歴史と民俗学
- カ 金山顯光・宮岡・浅香・高瀬1967「加賀三浦遺跡の研究」石川県教育委員会・松任町教育委員会

- キ 木倉豊信1959「郷土文化の黎明」小杉町史
- サ 坂本亨1963「5万分の1地質図巾一富山一」及び「同説明書」地質調査所
- タ 高橋勝喜1952「珠洲郡松波町新保遺跡の調査」石川県考古学研究会会誌4
 高橋勝喜外1955「石川県羽咋郡堀松貝塚調査報告」石川県羽咋郡旧福野潟周辺総合調査報告、石川県考古学研究会
 高橋勝喜1957「石川県の貝塚」県下の貝塚と古墳
 高橋勝喜1957「能登の先史文化」九学会編能登
 高橋勝喜・金山・吉岡・浅香1967「加賀三浦遺跡の研究」石川県教育委員会・松任町教育委員会
- 田中琢1964「須恵器製作技術の再検討」考古学研究42
- 田辺昭三1966「陶器古窯址群Ⅰ」平安学園研究論集第10号
- 段木一行1970「十三塚の歴史学的一考察—平尾十三塚の場合—」三浦古文化第8号
- ト 富山県教育委員会1965「太閤山遺跡調査報告書(上)」
 富山県教育委員会1966「新産業都市計画区域内中山南遺跡分布状況緊急調査概要」
 富山県教育委員会1969「中山南遺跡第6次緊急調査概要」
- ハ 橋本正1968「先土器時代の石器・二一形と機能に関する覚え書」若木考古第88-90号
 橋本正1970A「立山町吉峰遺跡調査報告書」富山県教育委員会
 橋本正1970B「開山遺跡—小杉町開山遺跡緊急発掘調査報告書—」富山県教育委員会
 早川荘作1936「越中史前文化」
- ヒ 広田寿三郎・濱・大谷1959「天神山遺跡調査報告書」富山県教育委員会・魚津市教育委員会
- フ 藤則雄1965「富山県射水平野の沖積統の研究」富山新港資料調査編Ⅱ—2, 放生津潟周辺の地学的研究, 富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所
 藤井昭二1962「5万分の1表層地質図—富山—」及び「同説明書」富山県
- ミ 渡邊・大谷・広田1959「天神山遺跡調査報告書」富山県教育委員会・魚津市教育委員会
- ヤ 柳田国男1910A「十三塚」考古学第8編第11号
 柳田国男1910B「十三塚」考古学雑誌1/4
- ヨ 吉岡康輔・浅香・高橋・金山1967「加賀三浦遺跡の研究」石川県教育委員会・松任町教育委員会
- ヲ 和島誠一1967「製鉄技術の展開」日本の考古学Ⅵ

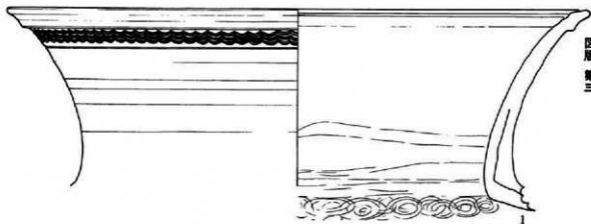
圖 版



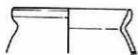
地形图



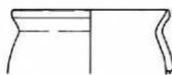
須恵器・土師器 実測図 S = 1 : 3



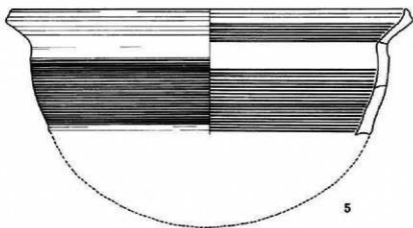
1



2



3

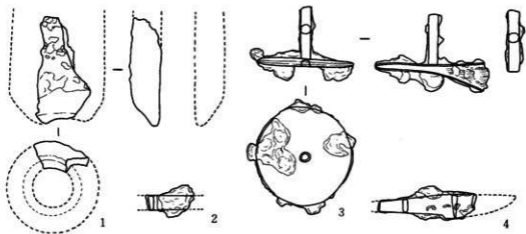


5

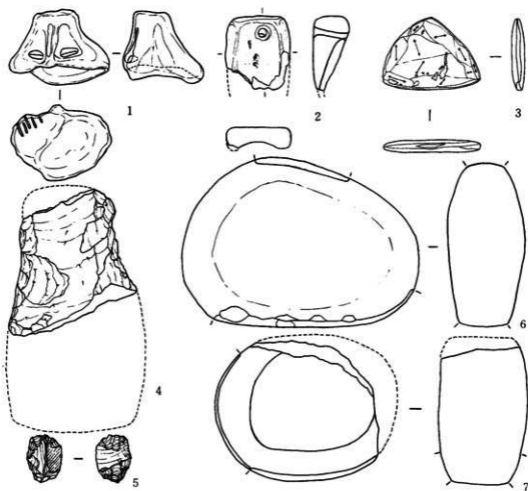


6

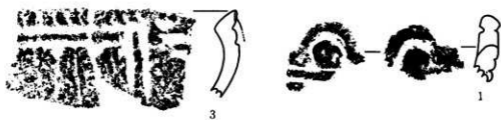
須惠器・土師器実測図 S = 1 : 3



鉄製品その他(フィゴのロ・紡錘車・刀子等) S=1:2



土製品・石器 S=1:2

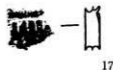




15



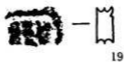
16



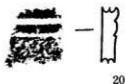
17



18



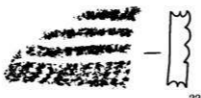
19



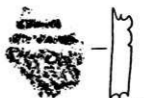
20



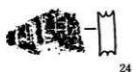
21



22



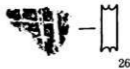
23



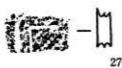
24



25



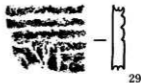
26



27



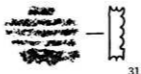
28



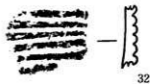
29



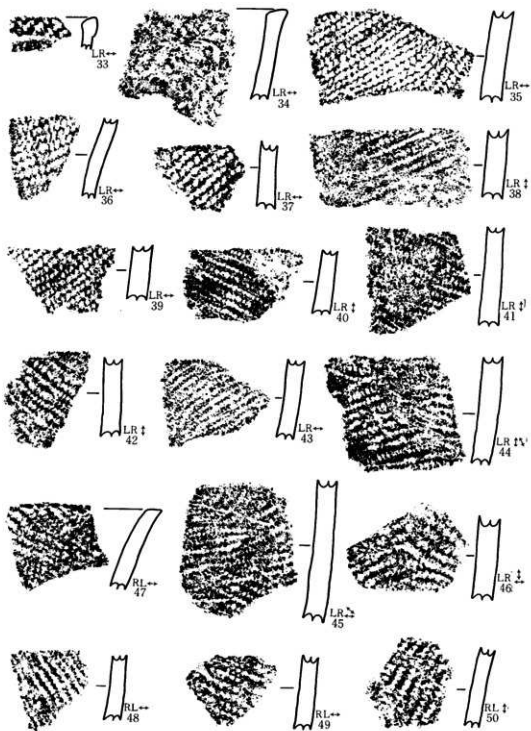
30



31

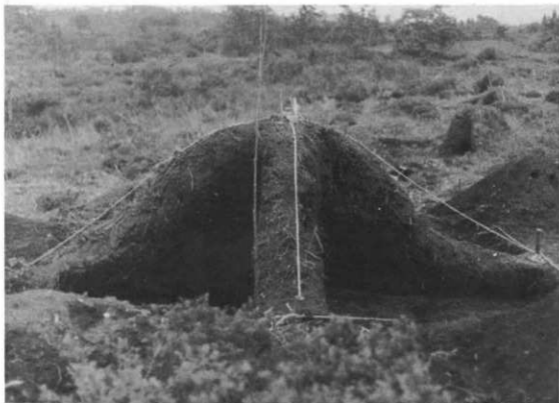


32

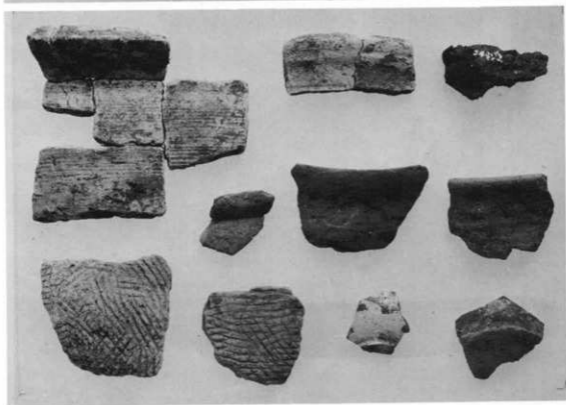
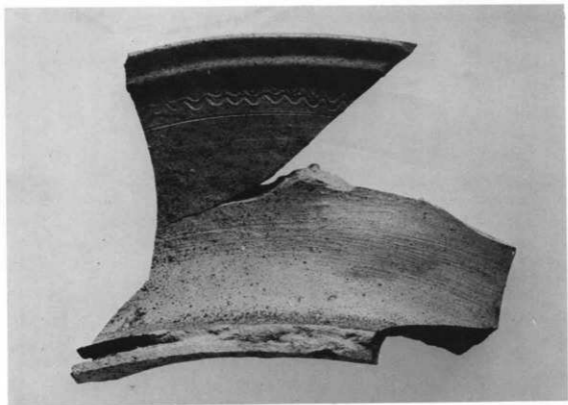


繩文式土器

S = 1 : 2



上 7号塚より13号塚方向を望む
下 4号塚地区1号ビット



須恵器・土師器・その他 S = 1 : 2



繩文式土器 S = 1 : 2

発行日 1971年3月

発行所 富山県教育委員会

印刷所 北陸明治印刷株式会社